

# 転生したらHard mode だった件

光車

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

《・・・複数のスキルの付与を失敗しました》

ひとつ目の歯車が、落ちた。

「強いな・・・あの狼」

ふたつ目の歯車が、こぼれ落ちた。

「クソっ。こんなのできるわけがねえ・・・」

みつつ目の歯車が、壊れた。

ひとつ、最初の歯車が落ちて、そこから連鎖的に始まる正史との乖離。

「シオン、ヴェルドラ・・・すまない」

この世界に救いはない。

壊れた舞台、存在しない脚本家。

それでも演劇は続く。

時は前にしか、進まない。

# 目次

回り出した壊れた舞台	1
ヒビの入った正史の歯車	6

## 回り出した壊れた舞台

『転生したらスライムだった件』という小説をご存知だろうか。

この小説は、三上悟という人がスライムに転生し、最強になっていく物語だ。

ストーリーは面白いし、上から目線になるが普通に良作だ。

けれど。

もし、その強さの根源となるスキルが無かったら？

もし、いろんな場面で運が悪かったら？

これは、いくつもの歯車が落ちてしまった物語で。

《…・…複数のスキルの付与を失敗しました》

ほら、物語の崩壊が始まった。

一体どのような物語になるのか。

それは、神すらも知らないだろう。

だってこれは……。

脚本家のいない、壊れた演劇なのだから。

\*\*\*

スライムに転生した。

何を言っているのかわからないだろうけど、俺もわからん。

部下を庇って、通り魔に刺されて死んで。

それで目が覚めたらスライムになってたというわけで。

感覚はあるけど、目が見えないなら不用意に動くこともできないし。

(・・・どうしよつかなく・・・)

途方に暮れていた。

でも、そのままでも仕方ないし、動くことにした。

周りの草は食べ終わったし、周りの探索か？

周りの食べられそうなものは全部食べた。

と、突然の浮遊感。

(まずっ)

落ちる。

そして水に落ちる感触。

(こ、今度は溺れて死ぬのか!?・・・いや、よく考えれば今の俺息してないな)

早速動き回ってしまったことを後悔することになるとは。

やる事もない。

ふと、たまたま思いついたことを実行してみることにした。

それは、水を全て飲み込む事。

とりあえず水をなくして、底を動いて出よう。

(よいしょつと・・・)

水を全て飲み込むには、それなりの時間がかかった。

そして、それが終わって、一息ついていた所で。

声が掛かった。

(聞こえるか？小さき者よ)

耳ではなく、頭に響き渡るような声。

(ん？俺か？)

(そうだ)

えらく尊大な口調で話しかけてくるその声。

まさか思っただけで反応出来るとは思ってなかったから、普通に反応してしまっただけ

れど・・・。

怖い。

何かわからないが、威圧されているような感じがする。

それは声の方向に近付けば近づく程強くなっていつている気がして。





ヴェルドラは俺の名前を。

俺は、ヴェルドラを収納する。

ヴェルドラの『究明者』によって、俺の保持してるスキルがわかって、それを使って封印を解くということになった。

俺のスキルは『収納者』。

触れたものを収納して、解析したり射出したりする事ができる能力だ。

解析が完了した物に關しては擬態も可能らしい。

それで解析し、この封印を解く。

幸い、名付けで強くなった事で近付くこともできる。

だからしばらくお別れだ。

(『収納者』！)

俺はヴェルドラを収納した。

## ヒビの入った正史の歯車

ヴェルドラを収納したあと、俺は射出の練習をしていた。

射出は普通にできるのだが、どうも威力が出ない。

水を射出して攻撃できないかとも考えてみたものの、刃ができるほどの速度で水を射出すること自体が難しそうだ。

なんでこんなことをしてるんだって？

バツカ、お前。

今の俺はスライムだぜ？

今の状態で魔物に襲われたらひとたまりもないじゃないか！

というわけで、戦闘手段を開発中。

(射出！ うーん、やっぱりダメか・・・)

練習用に使っている岩は何度やっても傷一つつかない。

体感的には既に100日以上練習し続けているんだが・・・

《スキル『水刃』を取得しました》

と、何かが聞こえた。

それは、転生する前に聞こえた声に似ている。

(だ、だれだ!?)

思わず問いかけるが、返答はない。

数秒待って、返答がなかったためため息をつく。

(・・・そういえば、ヴェルドラがスキルを取得するときは世界の声って言うやつが聞こえるって言うってたな・・・)

つまり今のは世界の声。

じゃあ返答が帰ってこないのも当たり前か。

・・・はあ。

(話し相手がいないって想像以上に辛いなあ・・・)

最近こうやってため息をつくことが増えてきた気がする。

いや、多分実際に増えているんだろう。

・・・いや、とりあえず今は射出の練習をしよう。

何かを今できるわけじゃないし。

(『水刃』！　　っておお！)

スキルを使ってみれば、かなり威力が出た。

さっきまで傷一つ付かなかった岩が、一回で切断されてる！

(よし、これなら戦えそうだな！)

そして俺は、ようやく洞窟から出ることにした。

そして、それから約30日後。

俺はようやくこの洞窟から脱出ができた。

迷いに迷い続けて、ようやくだ。

(疲れた……)

思わずそう思ってしまったほどには疲れている。

ここまでくるのにいろんな魔物と戦った。

大きな蜘蛛、ムカデの化け物、吸血蝙蝠、甲殻トカゲ。

そして、大きな黒い蛇。

とは言っても、すべてを倒してるわけじゃない。

甲殻トカゲは硬すぎて水刃が通らなかつたし、吸血蝙蝠は水刃がなかなか当たらない。  
い。

ムカデの化け物は気配を消して背後から襲ってくるし。

ムカデに関しては魔力感知で周囲を見ていたから問題なかつたけど、これがなかつた

らかなりキツかっただろうし。

蜘蛛は生理的に無理だ。

つい水刃を大量に放ってしまった。

今の所、攻撃手段が水刃しかないからこれが通じなかったらおしまいだ。実際甲殻トカゲは一体も倒せてないし。

そして、大きな蛇は本当に強かった。

甲殻トカゲほど硬かったわけじゃないけど、水刃でもほとんど通じなかった。

一撃離脱が基本になったけど、そのせいかなりの長期戦が強いられた。

それに物を一気に溶かしていく超強力な酸のプレスも厄介だった。

それでもなんとか倒して、いろんなところを探索して。

ようやく洞窟の外へと出ることができた。

この世界で初めて、俺は太陽の光が降り注ぐ場所に出たのだ…。